

JOMF 派遣医師便り (2014. 9)

◆シンガポール◆

デング熱～症状を中心に

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

7月号でご報告させていただいたとおりですが、シンガポールは昨年、正式に記録が残る1990年代以降では過去最多の患者数(22170人)を記録し、今年も昨年に迫る勢いとなっています。

当院でもデング熱の患者さんは時々、お越しになりますが、これほど流行っていても、当院で診断する例は、年に数例程度で決して多いわけではありません。もちろん、私の身近でも複数の方が実際にデング熱にかかっています。現地のスタッフも特に不安な様子もなく、現地の方はあまり危機感を実感していないのが本当のところのようです。

今回は、私の限られた経験の中ですが、どういう時に疑うか、どのような症状が出てくるかについてお話してみたいと思います。

大抵の場合、患者さんは発熱、それも半日ぐらいでぐんぐん上昇する高熱で受診されます。39度を超えることが多いです。咳や鼻汁などは通常ありません。目の奥の痛みが特徴とされていますが、個人的にはそれほど多くない印象です。多くの人は関節痛を訴えます。消化器症状を伴うこともあります。

ほぼ全例で共通しているのは、なんとも言いようのないだるさです。インフルエンザで典型的な症状の方は、だるさを訴え、いかにもだるそうな顔貌を示しますが、デング熱の方も同様です。発熱の高さより、だるさと顔貌がデング熱を疑わせません。50歳代の女性の例ですが、熱は37℃後半でそれほど高くなく、なぜ?かとも思われましたが、それにしでは、だるさが強く、数日続き、他の疾患も該当しないようでしたので、検査をしたところデング熱だった例がありました。発熱が低めだからと言ってデング熱は否定できません。

強いだるさは高熱を伴う疾患にはかなり共通した症状と思われるので、これだけで、臨床症状から診断することは無謀ですが、インフルエンザを否定でき、他の局所感染症(尿路感染など)を否定できるなら、患者数から考えて、当地では、デング熱の疑いは濃くなります。

当地では一般外来に、発熱後24時間を経過すれば、デング熱を判定できるキットがあります。これはNS-1抗原というデングウイルスの非構造蛋白を指標としています。発熱第1日目から患者血中に出現し、9日目頃まで血中に存在するといわれます。(検査のタイミングは発熱後24時間から5日目頃までです。感度92%、特異度はほぼ100%)。

発熱後、3、4日すると発症者の50%以下ですが発疹が認められます。一見、紫斑のよう

に見えますが、皮下出血はしていませんので、紫斑ではありません。辺縁が不整ではっきりしない径 1-2 cmの比較的大きな発疹が手足から体幹にかけて広がります。顔面には通常でません。

ただ、この発疹は当地で同時に流行しているチクングンヤ熱でも認められますので、これを見たからと言ってデング熱という確定はできません。

発熱は通常 4, 5 日続きます。血小板が下がり、出血を心配するのは、むしろ解熱に向かう頃からが多いので、解熱してきたからと言って安心はできません。十分な経過観察が必要です。また、血液検査上、肝障害も認められますが、重症化することはほとんどありません。

デング熱はウイルスを持った蚊が人を刺し、その患者さんをまた別の蚊が刺すと、その蚊もデング熱ウイルスをもった蚊となりますので、少なくともデング熱を発症した方（潜在性の方は対策の仕様がないうえ）が、蚊に刺されないような対策を、周囲の方が講じておくことが大切です。

良性の経過をたどる事がほとんどですが、怪しいと思ったら、医療機関を受診してください。